

記号的文法観としての認知文法の思考法 －言語の記号的側面の再考－

對馬 康博

0. はじめに¹

本稿は、Ronald W. Langacker が提唱する「認知文法(Cognitive Grammar)」の理論の基盤となる「記号的文法観(symbolic view of grammar)」を再考することで、認知文法の思考法を考察することを目的とする。Langacker の *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. (Vol.1)は1987年に Stanford University Press から正式に刊行されたものであるが、その一部の章の草稿は既に空間文法(Space Grammar)と呼ばれていた時代の1983年にIndiana University Linguistics Club から出されており、早くから言語の記号的側面(symbolic view of language)が強調されている。また、1979年に *Foundations of Language* に掲載された Langacker (1976)の論考は生成意味論(Generative Semantics)の枠組みから述べられたものであるが、早くも言語というものは独立した言語能力ではなく、人間の概念体系(conceptual structure)、すなわち、認知の営みの観点から述べるべき対象である旨を記している。このように、Langacker は認知文法を確立する前から、言語の文法を認知的にアプローチする方法論の萌芽的記述をしていたわけである。本稿では、その真髄(genius)とも呼べる記号的文法観に基づいて構築された認知文法は、言語を人間の一般的認知能力の観点から説明しようと試みる理論であることを確認していく。特に、記号的文法観とそれに関連する記述は Lanagcker の著作のあらゆる側面に散見されているため、集積的に整理することが本稿の目標である。

小稿の構成は以下の通りである。まず、第1節では、記号的文法観としての「文法」を確認する。つぎに、第2節では、認知文法がそう言われる

所以としての「認知」に焦点を当て、「認知」能力・プロセスを反映する文法観を概観する。以上の第1節と第2節を通じて認知文法の思考法を概括するが、つぎの第3節では、変形生成文法との対話を通じて、認知文法や生成文法の理論言語学が目指している目標を確認し、それぞれのパラダイムに触れる。さらに、第4節では、記号的文法観の現れとしての文法現象を通じて言語の記号的側面について再考する。第5節は結語である。

1. 記号的文法観としての「文法」

本節では、認知文法の理論的枠組みにおいて、記号的文法観としての「文法」という概念を明らかにしていく。

まず、つぎの引用からみよう。

[0] As its name implies, Cognitive Grammar is first and foremost a theory of **grammar**.

(下線は對馬による、以下同様) (Langacker 2008: 5)

この引用では、Langacker が提唱する「認知文法」は「文法理論」であることが示唆されている。つまり、認知文法は、単に意味論(Semantics)の一部として、語や文の意味記述をするだけでなく、「文法」を体系的に記述することを目標のひとつとして掲げていることが表明されていることになる。

さらに、認知文法では、[1]-[3]に挙げられているように、「記号的文法観(symbolic view of grammar)」を基本的精神のひとつに掲げる。²

[1] Language is symbolic in nature. It makes available to the speaker—for either personal or communicative use—an open-ended set of linguistic **signs** or **expressions**, each of which associates a semantic representation of some kind with a phonological

representation.

(Langacker 1987: 11)

[2] I start from the obvious assumption that language is basically symbolic in nature. It makes available to the speaker, for his own use or for purposes of communication with others, an open-ended linguistic signs or expressions each of which associates a semantic representation of some kind with a phonological representation.

(二重下線は原著による) (Langacker 1983: 6)

[3] CG's most fundamental claim is that grammar is **symbolic** in nature. What does this mean, exactly? Let us first define a **symbol** as the paring between a semantic structure and a phonological structure, such that one is able to evoke the other.

(Langacker 2008: 5)

[1]は1987年に Stanford University Press から正式に出版された認知文法の記念碑的書物 *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. のものである。下線部にあるように、言語というものは本質的に記号的であるということ、つまり、記号的文法観を採用することが表明されている。そして、言語は個人的もしくはコミュニケーションの目的で使用されるものであると打ち出されている。Langacker は、この4年前の1983年に、上掲の書物の草稿を Indiana University Linguistics Club から出している。その引用が[2]に当たるが、ここでも言語の記号的側面が重視され、さらに、言語は自分自身のための使用か他者とのコミュニケーションの目的で使用されることが述べられている。1983年と言えば、まだ認知文法という名は産声を上げておらず、空間文法(Space Grammar)と呼ばれていた時代の話であるが、Langacker はいち早く

言語の記号的側面を重要視していたことになるわけである。さらに、Langacker の2008年の著作でも、[3]のように、同様の精神が引き継がれ、音韻構造(phonological structure)と意味構造(semantic structure)の結びつきを記号(symbol)として定義していることになる。このように、Langacker の認知文法では、創生期から理論が深まりつつある現在に至るまで一貫して、記号的文法観が強調されているわけである。

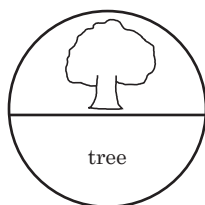
つぎに、言語機能について目を向けてみたい。[4]の引用を見よう。

[4] Language is shaped and constrained by the functions it serves. These include the **semiological function** of allowing conceptualizations to be symbolized by means of sounds and gestures, as well as a multifaceted **interactive function** involving communication, manipulation, expressiveness, and social communion.

(Lanagcker 2008: 7)

[4]では、言語機能のひとつとして、言語は記号的機能(semiological function)を果たすことが述べられており、これは先の記号的文法観に当たる。また、もうひとつの機能として、言語は相互作用的功能(interactive function)を果たすことが表明されており、これは、[1]で言えば“communicative use”、また[2]で言えば“purposes of communication with others”に相当する。³ すなわち、言語は記号的機能とコミュニケーション的機能をもつというのが認知文法の基本精神にあるわけである。

言語の記号的側面について、さらに詳しくみてみたい。先にみたように、記号的文法観に基づけば、言語は音(つまり、音韻極(phonological pole))と意味(すなわち、意味極(semantic pole))から構成されるものとして定義される。例えば、“tree”という語は図1のような音と意味が結びついたものとして図示される。



(Langacker 1987: 11)

図 1

この図では、円の上半分が意味を表しており、ここでは tree の概念が描かれている。他方、下半分は音が表されている。このように tree という語は音と意味が結びついたものとして定義することができる。こうした音と意味の結びつきは、一見すると、フェルディナン・ド・ソシュールの記号の恣意性(arbitrariness)という概念を彷彿させる。つまり、簡素に述べれば、語の音と意味の結びつきは恣意的であり、そこに動機付けを見出そうとしても、見出すことができないということがソシュールの思想にある。一方、Langacker はそうした恣意性という概念を完全には排除しないものの、動機付けが見出されるものには積極的に認めていこうとする姿勢を取る(cf. 對馬2016)。つぎの引用で確認しよう。

[5] [...] the arbitrary character of linguistic signs is easily overstated [...]. An obvious but seldom-made observation is that any polymorphemic linguistic sign (this includes the vast majority of expressions) is nonarbitrary to the extent that it is analyzable.

(角括弧内は對馬による、以下同様) (Langacker 1987: 12)

例えば、形態素レベルにおいて、*computer* はいわゆる「コンピュータ」というゲシュタルト(gestalt)的意味をなす記号表現である。この類の V + -er 表現は *compute* (計算する)と -er (人)という具合に部分的に分解

し、それを単純に足し算したところで、コンピュータという意味は算出されず、よって、ある程度、音と意味が恣意的に結びついた表現と言わざるを得ない。一方、complainer は「不満を漏らす人」という意味であるが、これは、complain（不満を漏らす）+ -er（人）、つまり、V + -er という部分に分析しても意味が推測できる合成的記号表現である。この種の V + -er という構築物は、意味の点で動機付けられており、完全に音と意味の結びつきが恣意的ではないということの意味する。このように、Langacker は記号表現の音と意味の結びつきが恣意的ではない事例も想定し、そこに動機付けを求めていることになる。

さて、このような言語の記号的側面は、図 2 のように概念化される。図 2 (a, b) はそれぞれ、音韻構造(P, Phonological Structure)と意味構造(S, Semantic Structure)を表しており、これらが結びつくと図 2 (c) の記号構造(Σ , Symbolic Structure)として扱われることになる。こうした記号構造(Σ)は、さまざまなレベルで構造同士が結びつくと、図 2 (d) のような合成構造、すなわち、記号表現(E, Expression)が記号化される。ただし、先の V + -er 表現のように、合成構造は積み木のように部分が単純に足し合わさって出来上がるという類のものではなく、部分には完全に還元できないゲシュタルト的意味を持ち合わせている事例があることに注意しなければならない。

こうした記号表現は語彙・形態素・統語の様々な側面で見受けられる。特に認知文法では、[6]のように、語彙・形態素・統語は連続体(continuum)をなすものとして定義される。

[6] Lexicon, morphology, and syntax form a continuum, divided only arbitrary into discrete “component”.

(Langacker 2007: 122)

これを受けて、図 3 はこうした連続的視点から描かれている。この図で

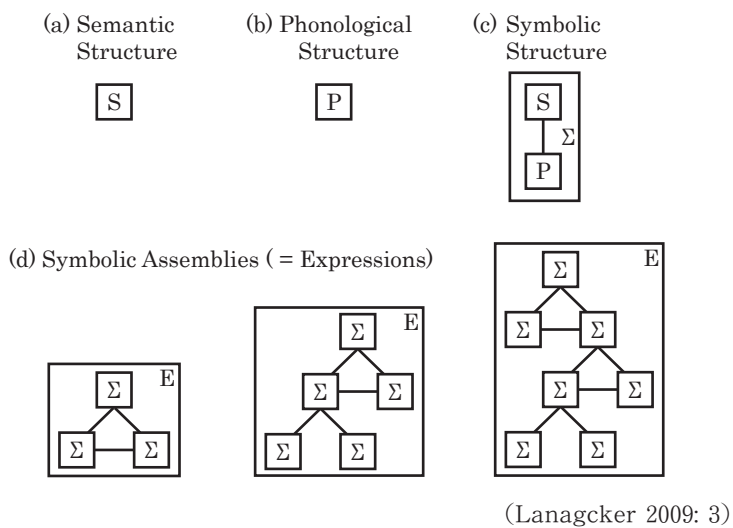


图 2

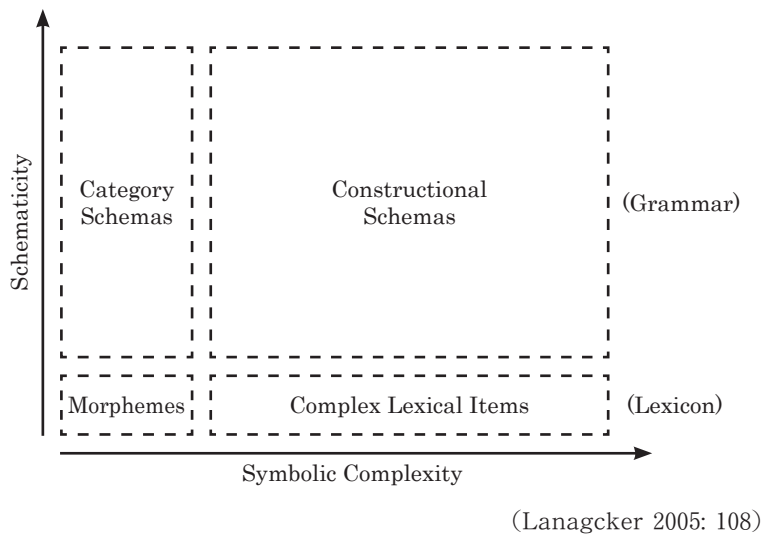


图 3

は、縦軸は抽象度(abstractness)を表しており、一方、横軸は記号の複雑性(symbolic complexity)を示している。まず、形態素(morpheme)は、抽象度と記号の複雑性がどちらも低いものとして描かれている。同様に、品詞に相当する範疇スキーマ(category schema)は抽象度は高いが、記号の複雑性は低いものとして描写されている。さらに、語彙項目(complex lexical item)は抽象度は低い、記号が複雑であるものとして定義される。また、いわゆる統語はその規則となる構文スキーマ(constructional schema)として、抽象度も複雑性も高いものとして描かれる。このように、認知文法では、従来の伝統文法や言語学では独立して扱われていたものを連続的に扱うことで自然な定義づけを試みているわけである。

つぎに、言語知識に対する認知文法の考え方をみてみよう。

[7] In GC, a language is described as a structured inventory of conventional linguistic units. The units (cognitive “routines”) comprising a speaker’s linguistic knowledge are limited (by a restriction called by the *content requirement*) to semantic, phonological, and symbolic structures, or else emerge from such structures by the processes of abstraction (schematization) and categorization.

(Langacker 1999: 98)

[8] [...] the grammar of a language is defined as those aspects of cognitive organization in which resides a speaker’s grasp of established linguistic convention. It can be characterized as a structured inventory of conventional linguistic units.

(Langacker 1987: 57)

[7]と[8]では、言語(の文法)は「構築される慣習的な言語単位の蓄え

(a structured inventory of conventional linguistic units)」と定義される。⁴ また、[7]で述べられているように、言語知識を含む言語単位は、「実際の」使用における「実際の」話者の言語知識として制限する「内容要件(content requirement)」によって厳しく規定されることになる。⁵

続いて、文法の有意味性について考察しよう。認知文法では、[9]のように、文法それ自体に意味がある(meaningful)であると考えている。より正確に言えば、文法はそれを通して我々が世界を理解したり関わったりする認知機構の重要な側面を担っていることになる。また、こうした文法の有意味性は[10]のように導かれるものである。

[9] [...] **grammar is meaningful**. [...] [...] grammar allows us construct and symbolize the more elaborate meanings of complex expressions (like phrases, clauses, and sentences). It is an essential aspect of the conceptual apparatus thorough which we apprehend and engage the world.

(Langacker 2008: 4)

[10] Consequences: (i) Grammar is not distinct from semantics but incorporates it as one pole. (ii) The elements of grammatical description are not special, irreducible primitives, but reduce to form-meaning pairings. (iii) Every valid grammatical construct is meaningful.

(Langacker 2007: 122)

こうした認知機構としての文法の背後では、記号的文法観が反映され、ゆえに文法は音と意味が結びついた有意味な記号を記述することになる。

さて、こうした記号的文法観は、[11]で挙げられている認知文法の3つの基本的精神の中のひとつとして重要な位置を占めている。[12]の野村に

よる解説と共にみよう。

[11] 認知文法の基本的精神:

- a. naturalness [自然さ]
- b. conceptual unification [概念的統一]
- c. theoretical austerity [理論の簡素さ]

(角括弧内は對馬による) (Langacker 1990: 543)

[12] [...]「自然さ」とは「実在論」,「概念的統一」とは言語の本質は記号的であるとし,語彙・形態論・統語論のすべてを同じ道具立てで説明しようとする「記号的文法観」,「理論の簡素さ」は「内容要件」のことを指している。

(野村 2014: 57)⁶

特にこの中で、記号的文法観は概念的統一(conceptual unification)の問題として、[6]や図3でみた語彙・形態素・統語は連続体であるという概念に通ずるものであり、言い換えれば、語彙・形態素・統語は、自律した概念ではなく、音と意味が結びついた連続体をなす記号して扱うという点に認知文法のパラダイムの大きな意義がある。^{7 8}

以上、この節では、記号的文法観は認知文法の理論的基盤となる重要なテーゼのひとつであることを確認した。

2. 「認知」能力・プロセスを反映する文法観

つぎに、こうした文法観が認知文法とも言われる所以の「認知」について、認知能力・認知プロセスの観点から考察していく。

まず、言語と認知の関係から探ろう。つぎの引用をみたい。

[13] Language is an integral part of human cognition. An account

of linguistic structure therefore articulate with what is known about cognitive processing in general [...]. [...] we have no valid reason to anticipate a sharp dichotomy between linguistic ability and other aspects of cognitive processing.

(Langacker 1987: 12)

Langacker によれば、言語は人間の認知機構の重要の一部を担うものであり、特に、「一般的認知能力(cognitive processing in general)」によって動機付けられている。このことは、認知文法では、言語に特化した能力(e.g. 言語能力(language faculty))を想定しないということを意図している。すなわち、認知文法では、言語は知覚、記憶、カテゴリー化などをはじめとする人間の一般的な認知能力の共働により動機づけられるという姿勢を取る(cf. 對馬 2015)。さらに Langacker は認知能力について、つぎのように述べている。

[14] As for CG in particular, care is taken to invoke only well-established or easily demonstrated mental abilities that are not exclusive to language. We are able, for example, to focus and shift attention, to track a moving object, to form and manipulate images, to compare two experiences, to establish correspondences, to combine simple elements into complex structures, to view a scene from different perspectives, to conceptualize a situation at varying levels of abstraction, and so on.

(Langacker 2008: 8)

Langacker によれば、認知能力は言語に特化してではなく既に確立されているか直ぐに実証可能なものということになる。例えば、この認知能力には、焦点調整(to focus and shift attention)、視線移動(to track

a moving object)、イメージ形成(to form and manipulate images)、比較(to compare two experiences)、対応関係の確立(to establish correspondences)、要素の結合(to combine simple elements into complex structures)、視点・観点(to view a scene from different perspectives)、概念化・抽象化(to conceptualize a situation at varying levels of abstraction)などが含まれる。

さて、このように言語は人間の認知機構に支えられているわけだが、早くもLangacker は、この言語観が認知文法と呼ばれる以前の生成意味論の時代の1976年に、言語と認知のあり方をつぎのように考察していた。

[15] [...] cognition—or conceptual structure—is essentially the same for speakers of all languages. This is not to say that all speakers will conceive of the same things or have the same thoughts, only that conceptual structures have the same general character for all speakers, are constructed from the same inventory of primitive concepts, obey the same constraints, and are rather more similar in content than one might expect.

(Langacker 1976: 320)

Langacker によれば、認知機構はあらゆる言語の話者にとって本質的に同じ性格のものであるということである。つまり、認知機構は個別言語ごとの認知主体にとって異なるものではなく、人間全般の能力として想定されるものである。そして、認知能力と文法に関する能力については、[16]の引用のように、明確な線引きをすることができないものであると推定する。すなわち、一般的認知能力と文法を司る能力は自律的なモジュールをなすものではないことが表明されているわけである。

[16] Now some human faculty, some component within the overall

human psychological system, must be responsible for enumerating and characterizing conceptual structures[...]. It may be concluded that there is no clear division between grammatical and cognitive abilities, and that grammatical rules and cognition both operate on the same kinds of structures.

(ibid.: 320-321)

つぎに、Langacker の意味観について考察しよう。前節でみたように、記号表現は音と意味が結びついたものであるわけだが、そもそも意味の在り処はどこなのだろうか？まず、つぎの引用を見よう。

[17] [...] meanings are the minds of the speakers who produce and understand the expressions.

(Langacker 2008: 27)

[18] Linguistic meaning resides in conceptualization, [...]. [...] Linguistic meaning involves both conceptual content and the construal imposed on that content.

(ibid.: 43)

認知文法では、意味は話者、すなわち認知主体の心の中にあると考え、さらに、言語の意味とは概念化(conceptualization)の中にあると考えている。従来の客観主義的言語学では、意味は客体にのみ存在し、主体不在の意味づけがなされていたが、人間の主体的な認知の営みを重視する認知文法では、意味は客体としての概念内容(conceptual content)のみならず、それを解釈する認知主体の捉え方(construal)の中にもあるとする。

さらに、概念化と言語の関係について考察したい。Langacker は早くも1976年につぎのように指摘している。

[19] Language is an indispensable tool of thought, and we naturally tend to use the tools we have readily available when they suffice rather than make new ones, but we can and do fashion new tools as circumstances demand—everyone does it many times every day in the creation of novel sentences and descriptive expressions. People conceptualize, language does not. People may use language to help them arrive at new conceptualizations, and then to label the conceptualizations they arrive at but language does not do the thinking, and people do not always use language when they think.

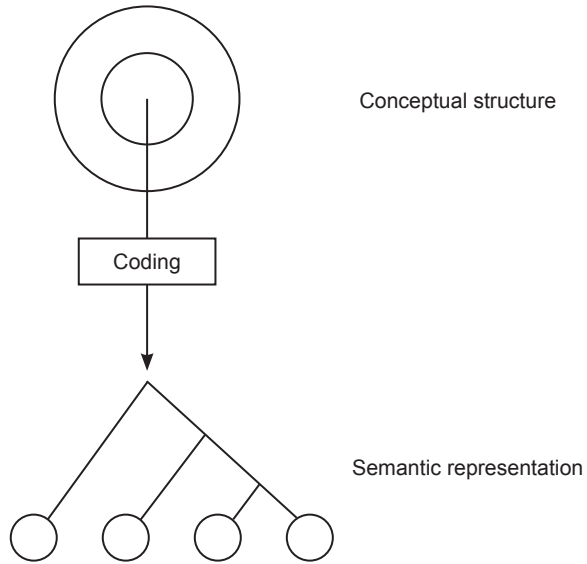
(Langacker 1976: 313)

人間は概念化できるが、言語そのものは概念化できない。つまり、言語は我々の概念化を促すものにすぎないわけである。以上のように考えてみると、認知機構による概念化は人間全般の能力であり、個別言語ごとの認知主体にとって異なるものではないことになるが、では、個別言語ごとの意味や表現の違いはどこから生まれるものなのであろうか？この点は、先に考察した、事態の捉え方に起因すると考えることができる。つまり、個別言語では、一般的な認知能力を活用する主体が事態を解釈する際に捉え方が異なるために、言語表現の意味も異なって現れることになるわけである。

最後に、概念化から記号化への関係について考察したい。つぎの引用と図をみよう。

[20] To translate a conceived situation into linguistic terms, a speaker must select pertinent aspects of his current conceptual structures and cast them in a form appropriate for linguistic operations; let us this process ‘coding’.

(ibid.: 322)



(ibid.: 323)

図 4

Langacker (1976)によれば、概念化された状況(a conceived situation)から記号化(coding)する際、話者である認知主体は、概念化されたもの(conceptual structure)の中から適切な部分を選択し、言語操作(linguistic operation)にふさわしい形(すなわち、記号表現の意味構造(semantic representation))にするということである。つまり、概念化されたものが全て記号化・言語化されるわけではないわけである。もっと言えば、Langacker (1987)は“our ability to construe a conceived situation in alternate ways” (Langacker 1987: 110)と言うが、我々は概念化された状況(a conceived situation)に対して様々な方法を用いてその状況を捉える(construe)能力を有し、記号化・言語化を行っているわけであるから、当然、記号化された記号表現の意味構造には、我々の事態の「捉え

方(construal)」が関与しているわけである。

以上、この節では、認知文法がそう言われる所以としての「認知」に焦点を当て、認知能力・プロセスを反映する文法観を考察してきた。

3. 認知文法と生成文法との対話

3.1 認知文法の文法観のまとめ

これまで、文法観として、第1節では、記号的文法観を、第2節では、「認知」能力・プロセスを反映する文法観を考察してきた。これらは、大雑把に言って、つぎのようにまとめることができる。

[21] 認知文法の文法観のまとめ(Tentative.):

認知文法(Cognitive Grammar) = ①言語を音と意味の結びついた記号として扱う文法観 + ②人間の認知能力・プロセスを反映する文法観

①には「記号的文法観(symbolic view of grammar)」という名称が与えられているが、これに振れば、②は「認知的文法観(cognitive view of grammar)」というように言うことができよう。また、より正確に言えば、これらの概念は、[21]のように等価に足し算的に並ぶものではなく、つぎのようになる。

[22] 認知文法の文法観のまとめ(Modified.):

認知文法(Cognitive Grammar) = 人間の認知能力・プロセスの観点から(cf. 認知的文法観)、音と意味の結びついた記号表現としての自然言語(cf. 記号的文法観)を体系的に記述する文法観

この節の以下では、生成文法との対話を通じて、こうした文法観に基づく認知文法について、より整理を進めていく。

3. 2 認知文法と生成文法の目標

この節では、認知文法と生成文法の目標について考察していく。まず、生成文法が掲げる研究問題の設定から考察しよう。

[23] 生成文法の基本的問題群

- (1) 言語の知識
- (2) 言語(の知識)の獲得
- (3) 言語の使用
- (4) 言語の脳科学的基盤
- (5) 言語の進化・(系統)発生

(訳者による序説) (Chomsky: 2004 [福井・辻子(訳) 2011: 2])

福井・辻子によれば、生成文法のパラダイムは[23]に挙げる基本的問題群を保持しているといい、さらに、人間の言語に特化し、自律的な能力としての「言語能力(language competence)」に焦点を当てて研究を進めてきているという。中でも(1)の「言語の知識」に関しては、ある母語話者が母語を話すときにいかなる知識を持っているのかということを記述する「記述的妥当性(descriptive adequacy)」の問題として、(2)の「言語(の知識)の獲得」については、ある母語話者がある言語を母語としていかに獲得するのかを説明する「説明的妥当性(explanatory adequacy)」の問題として初期の変形生成文法(Transformational Generative Grammar)の時代から論じられている(cf. Chomsky 1965)。すなわち、人間の「知」の解明、とりわけ言語に関する「知」の解明が生成文法で論じられる主要な目標となる。ただし、福井・辻子によれば、(3)の「言語の使用」、(4)の「言語の脳科学的基盤」、(5)の「言語の進化・(系統)発生」については、生成文法は体系的には取り組んできていないという。⁹

一方、認知文法では、どのような目標設定をしているのだろうか？本稿では、少なくとも、[23]の基準は、生成文法だけに特化した問題設定では

なく、言語科学全般に適用されうる概念であり、当然、認知文法にも当てはまる問題設定基準だと指摘したい。認知文法では、(1)の「言語の知識」については、認知文法理論の萌芽期から人間の認知の観点から説明されている(cf. Langacker 1983, 1987, 1991, 2008など)。(2)の「言語(の知識)の獲得」については、「使用依拠モデル(Usage-Based Model)」の観点から論じられている(Langacker 1999, 2000, Tomasello 2003など)。また、(3)の「言語の使用」についても、認知文法では、創生期から言語の実際の使用に根ざした使用依拠モデルを採用しており、この点から(1)や(2)の概念を説明しているということは特筆に価する。しかしながら、(4)の「言語の脳科学的基盤」については、George Lakoffらの若干の研究があるものの、現時点では必ずしも熟成しているとは言えない。同様に、(5)の「言語の進化・(系統)発生」についても中村(2012)や對馬(2015)などの研究があるものの、さらなる研究の飛躍が望まれている。いずれにしても、生成文法同様に、人間の「知」の解明が認知文法の最終的な目標のひとつとして掲げられていると考えられるわけである。

以上のように、変形生成文法も認知文法も同じく、人間の「知」の解明、とりわけ、言語に関する「知」の解明を目標に掲げていることは間違いない。ただし、両者が違うとすれば、それはアプローチ法ということになる。このことを明らかにするために、「登山」のメタファーを使って、図5とともに整理しよう。つまり、生成文法も認知文法も山頂にある人間の「知」の解明を目指し、同じ山を登っている点では同じである。¹⁰ しかしながら、登山を始めた時期(すなわち、理論の創成期)は変形生成文法の方が早し、認知文法は後になってから登り始めている。また、登山口・登山道も両者では異なっている。当然、登山口・登山道が異なれば、登り方(つまり、アプローチ法)も異なるし、登山者の装備品(すなわち、理論的道具立て)も違う。したがって、一見すると登山口・登山道も異なる両者は、全く異なった印象を受けるが、その頂きは同じであり、現時点では、上掲の問題群の全てを解明していないわけであるから、どちらもその山頂には至って

いない。



図 5

本節の以下では、生成文法との対話を通じて、認知文法の言語観をさらに洗い出そうとするが、決してどちらの理論が正しいとか優れているという類のものを主張するものではないということを予めお断りしておく。究極的には、共通の目標の人間の「知」の解明が達成されれば、そのようなことは瑣末な問題となると考えるからである。

3.3 科学観

まず、科学観からみよう。つぎの引用にみるように、生成文法は「自然科学」としての言語学の姿勢を表明している。

[24] 言語に対する他の様々なアプローチから生成文法理論を際立たせている最も顕著な特徴は、それが言語学を、「自然科学」として捉えている点にある。[…] 生成文法理論の目標は、UGおよびI言語の本質の解明、もう少し研究上の実態に即して言えば、各I言語の特性を解析することを通して究極的にはUGの本質を解明することにあるが、ここで注意したい

のは、I言語にせよUGにせよ、決して言語学者が説明の便宜上作り出した仮構ではなく、実際に脳内に実在する「自然物」であるということである。かくして、生成文法においては言語学はヒトの脳内に内在するUGという自然現象を対象とする学問であるということになる。

(福井 2012: 13-20)

他方、認知文法はより根源的(radical)な自然さを打ち出している。つぎの引用をみよう。

[25] [...] language structure resides in cognitive processing, patterns of neural activation in the overall processing activity of the brain and the body. Insofar as possible, language is seen as recruiting incorporating other cognitive processes and systems — memory, attention, perception, categorization, and so on. It follows that the theory and description of language, though driven by linguistic facts, must be broadly compatible with basic findings in related disciplines.

(Langacker 2004: 37)

認知文法では、実際に実在するもののみを記述対象とし、さらに、実際に実在するものを説明の道具立てに使用しようとする。したがって、一切の理論的仮構物を認めない姿勢を取る。また、認知文法は、生成文法が自然科学として想定している脳内の普遍文法(Universal Grammar, UG)を疑問視する。むしろ、認知文法では、人間は一般的な認知能力の総体を活用することによって言語を司っていると考えている。さらに認知文法は、認知科学としての姿勢を強調し、言語の実際の使用主体と実際の使用を重視し、たとえ、理論的道具立てであっても、実際に実在し実証可能な認知能力とプロセスを想定し、この観点から言語事実を説明する。また、

隣接する認知科学分野との共働の精神から、こうした認知能力やプロセスに他の関連分野との共通性を見出し、認知科学的・学際的プログラムを提供しようと試みる科学観を採用している。¹¹

3.4 方法論

つぎに、方法論について考察しよう。まず、生成文法は、つぎの引用のように、物理学を中心とする科学の方法を採用する。つまり、これは物理学といった方法を言語学にも適用するという「方法論的一元論」に当たる。

[26] [...]なぜ生成文法は言語学を自然「科学」であると主張するのだろうか？それは生成文法理論がUGという自然現象の本質の解明を目指すに当たり、物理学を中心とする近代科学の方法を採用するからである。

(福井 2012: 20)

一方、認知文法は、つぎの引用のように、物理学での方法論を排斥し、むしろ「方法論的二元論」(もしくは「方法論的多元論」)とも呼べるべき、言語学の方法論を採用する。

[27] What is possible in physics (e.g. precise quantitative predictions) may not be possible in linguistics, which deals with aspects of the human mind.

(Lanagcker 1987: 33)

3.3節で確認したように、認知文法が想定する認知能力やプロセスによる方法論は、隣接する認知科学分野と共通するところがあり、ゆえに認知文法はそれらの認知科学分野と方法論を共有するわけである。

3.5 言語に特化した言語能力

続いて、言語能力について考察しよう。まず、生成文法は、つぎの引用の通り、話し手・聞き手の言語知識といった言語能力(competence)を想定し、実際の言語使用といった言語運用(performance)と明確に区別する。

[28] We thus make a fundamental distinction between *competence* (the speaker-hearer's knowledge of his language) and *performance* (the actual use of language in concrete situations).

(Chomsky 1965: 4)

また、つぎの引用のように、文法とは、「理想化された」話し手・聞き手の「理想化された」言語能力によって規定される。

[29] To study language, then, we must attempt disassociate a variety of factors that interacts with underlying competence to determine actual performance; the technical term “competence” refers to the ability of the idealized speaker-hearer to associate sounds and meanings strictly in accordance with the rules of his language. The grammar of language, as a model for idealized competence, establishes a certain relation between sound and meaning—between phonetic and semantic representations.

(Chomsky 2006: 102)

さらに、生成文法は、つぎの引用のように、非常に大雑把に言って、2つの要素を結合するという「併合(merge)」という概念を導入する。最近のミニマリスト・プログラムでは、併合には外的併合(external merge)と内的併合(internal merge)が設けられ、「再帰性(recursion)」の問題として、言語の創造的側面を重視する。これにより、Humbolt のいうところの「有限の手段の無限の使用(“make infinite use of finite means”

(Chomsky 2006: 18))」が実現される。

[30] So in fact, the two kinds of Merge that are possible are taking two things and putting them together or taking one thing and taking a piece of it and sticking it at the edge. [...] External Merge is used, basically, to give you argument structure. Internal Merge is basically used to give you discourse-related information, like focus, topic, new information, all that kind of stuff that relates to the discourse situation.

(Chomsky and McGilvray 2012: 16-17)

また、[28]でみたように、生成文法は言語能力と言語使用に一線を画すわけであるから、つぎの引用のように、認知文法でいうところの使用依拠モデルの概念を排斥する。

[31] [...] language contains devices for generating sentences of arbitrary complexity. Repetition of sentences is a rarity; innovation, in accordance with the grammar of the language, is the rule in ordinary day-by-day performance. The idea that a person has a “verbal repertoire”—a stock of utterances that he produces by “habit” on an appropriate occasion—is a myth, totally at variance with the observed use of language. Nor is it possible to attach any substance to the view that the speaker has a stock of “patterns” in which he inserts or morphemes.

(Chomsky 2006: 105)

ここで、一方の認知文法の立場をみよう。まず、認知文法は言語に特化した自律的な言語能力に対して、つぎの引用の通り、疑問を抱いている。

[32] There is of course no question that people have the capacity to learn a language, and that this involves innate structures and abilities. What is controversial is whether some of these structures and abilities are unique to language, possibly constituting a separate module package with special properties not reflective or derivative of other, more general cognitive functions. In my opinion a convincing case has not yet been made for a unique linguistic faculty.

(Langacker 1987: 13)

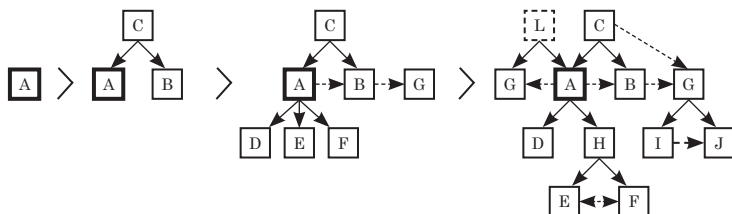
そこで認知文法は、つぎの引用の通り、「実際の」話し手・聞き手の「実際の」言語知識の蓄えの使用を重視する。このような考え方は「使用依拠モデル (Usage-Based Model)」と呼ばれ、認知文法の根幹をなす精神のひとつとして数えられる。

[33] **usage-based approach:** Substantial importance is given to the actual use of the linguistic system and a speaker's knowledge of this use; the grammar is held responsible for a speaker's knowledge of the full range of linguistic conventions, regardless of whether these conventions can be subsumed under more general statements. A nonreductive approach to linguistic structure that employs fully articulated schematic networks and emphasizes the importance of low-level schemas.

(ibid.: 494)

このモデルでは、言語に関する能力(e.g. 一般的認知能力の総体を反映する文法に関する能力)と言語使用を明確に区別しない。また、言語を記号

として扱い、音と意味のペアとして記述し、さらに、言語に関する知識は実際の使用に根ざしたネットワークをなすものとして、つぎの図のような「複合ネットワークモデル(Complex Network Model)」を採用する。

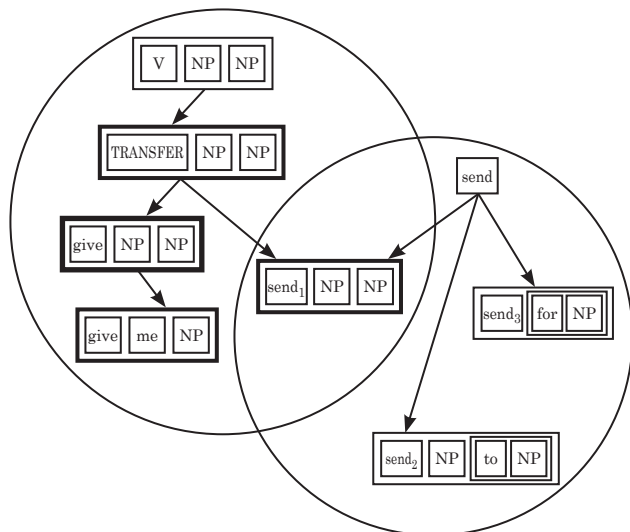


(Langacker 1990: 271)

図 6

具体例として、二重目的語構文のネットワークをみよう。先に、認知文法では、語彙・形態素・統語は構文として連続体をなすことをみたが、二重目的語構文のネットワークでも同じことが言える。図 7 は二重目的語構文のネットワークを示している。この図では、左図は二重目的語構文の情報、右図は語彙としての“send”のものである。「実際の」話し手・聞き手の「実際の」言語知識の蓄えの使用を重視する使用依拠モデルに基づくネットワークでは、抽象的な統語規則としての二重目的語構文の高次の構文スキーマ“V NP NP”は規則としては、帰納的に導かれたものとして存在はするが、使用上の活性度は低いものとして想定する。逆に、特定の語彙項目と結びついた低次のスキーマ“give NP NP”や“give me NP”の方が使用の活性度が高いものとして記述される。こうした使用における活性度の度合いはそれぞれを囲む四角の線の太さによって表示されている。さらに、“send NP NP”は二重目的語構文と語彙項目の“send”のどちらからも導かれるものとして規定され、構文と語彙が連続的なネットワークをなしていることが示されている。このように、認知文法では、言語に関する能力と言語使用を区別することなく記述することで、「実際の」話

し手・聞き手の「実際の」言語知識の蓄えによって文法が構成されることになるわけである。



(Langacker 1999: 123)

図 7

3. 6 自律性(autonomy)

つぎに自律性(autonomy)について考察しよう。まず、生成文法では、2つの自律性が想定されている(cf. Chomsky 1965)。ひとつは、言語能力に関する自律性で「言語器官の自律性(autonomy of language faculty)」である。これにより、人間の脳内には言語に特化した自律したモジュールをなす言語能力が指定される。もうひとつは、統語・音韻・意味を区別する「統語論の自律性(autonomy of syntax)」である。これにより、統語・音韻・意味の情報はそれぞれ自律的に扱われることになり、これら3つの概念はインターフェース上で結ばれることになるが、統語論は他の2者よりも優位な情報を持つものとして優先権が与えられる。

特に、Langacker (1991)は自律性という概念について、つぎの引用の通り、強い自律性と弱い自律性の2つに区分している。

[34] By the first definition, syntax (and more generally, grammar) is autonomous unless it is fully predictable in terms of meaning and other independent factors. Let us call this **weak autonomy**. [...] The second definition says that grammar is autonomous by virtue of being distinct from both lexicon and semantics, constituting a separate level of representation, whose description requires a special set of irreducible grammatical primitives. Let us call this **strong autonomy**.

(Langacker 2009: 1)

その上で、生成文法がとる統語論の自律性の立場について、Langackerは「強い自律性(strong autonomy)」と評し、他方、認知文法は「弱い自律性(weak autonomy)」の姿勢をとることが表明されている。生成文法の強い自律性の見解は、「自律性のテーゼ(Autonomy Thesis)」と呼ばれ、つぎのように定義される。

[35] **Autonomy Thesis:** Grammar constitutes a separate, irreducible level of linguistic structure (one with its own constructs, representations, primitives, etc.) that is properly described without essential reference to meaning.

(Langacker 1991: 515)

つまり、各部門を自律的に扱うことで言語構造を意味を伴わずに記述することになる。一方、認知文法の弱い自律性の姿勢は「記号的テーゼ(Symbolic Thesis)」と呼ばれ、つぎの引用の通り考えられる。

[36] **Symbolic Alternative:** Grammar is inherently symbolic; only units with both semantic and phonological import are required for its proper characterization.

(Langacker 1991: 515)

さらに Langacker は文法が自律的なものではないものとして、つぎのように述べている。

[37] Grammar (or syntax) does not constitute an autonomous formal level of representation. Instead, grammar is symbolic in nature, consisting in the conventional symbolization of semantic structure.

(Langacker 1987: 2)

つまり、認知文法では、文法は記号的であるとして、音と意味のペアとしての慣習的な記号の問題であることが改めて表明されていることになる。

3.7 文法と記述

続いて、文法と記述の関係について考察しよう。生成文法では、先にも確認し、さらにつぎの引用でもみるように、文法は「理想化」された話し手・聞き手に内在する「理想化」された言語能力の記述にあることが述べられている。

[38] A grammar of a language purports to be a description of the ideal speaker-hearer's intrinsic competence. [...] A fully adequate grammar must assign to each of an infinite range of sentences a structural description indicating how this sentence is understood

by the ideal speaker-hearer.

(Chomsky 1965: 4)

その上で、Chomsky は、先にみた記述的妥当性と説明的妥当性についてつぎのように詳述している。

[39] A grammar can be regarded as a theory of language; it is *descriptively adequate* to the extent that it correctly describes the intrinsic competence of the idealized native speaker. [...] To the extent that a linguistic theory succeeds in selecting a descriptively adequate grammar on the basis of primary linguistic data, we can say that it meets the condition of *explanatory adequacy*. That is, to this extent, it offers an explanation for the intuition of native speaker on the basis of an empirical hypothesis concerning the innate predisposition of the child to develop a certain kind of theory to deal with the evidence presented to him.

(ibid.: 24-26)

つまり、当初、変形生成文法は、当該言語の母語話者の知識を記述するという記述的妥当性を目指し、それを満たそうとして、「変形規則 (transformational rule)」が導入された。しかしながら、当該言語を母語話者がいかに獲得するのかという説明的妥当性を満たそうとした結果、今度は変形規則を減少させ、最終的には排除させる結果となった。その後、「普遍文法(Universal Grammar)」を記述するために「移動(movement)」や「併合(merge)」という概念が導入され、言語の特徴である「再帰性(recursion)」を説明できるようになったわけである。

一方、先にみたように、認知文法は、記号的文法観に基づき、文法を「実際の」話し手・聞き手の「実際の」慣習化された言語の蓄え(a

structured inventory of conventional linguistic units)の記述と考え、使用依拠モデルに基づいて特徴づけようと試みるパラダイムであるわけであり、変形生成文法と一線を画すことになる。

3.8 言語使用の創造的側面

続いて、言語使用の創造的側面について目を向けよう。特に、生成文法では、言語使用の創造的側面が重視され(cf. Chomsky 2009³)、初期の変形生成文法の頃からつぎのように考えられていた。

[40] Within traditional linguistic theory, furthermore, it was clearly understood that one of the qualities that all languages have in common is their “creative” aspect. Thus an essential property of language is that it provides the means for expressing indefinitely many thoughts and for reacting appropriately in an indefinite range of new situations [...]. The grammar of a particular language, then, is to be supplemented by a universal grammar that accommodates the creative aspect of language use and expresses the deep-seated regularities which, being universal, are omitted from the grammar itself.

(Chomsky 1965: 6)

つまり、先にみた Humbolt の言語精神にある「有限の手段の無限の使用」によって言語の創造性が満たされ、現在では、それは再帰性の問題として扱われている。また、こうした言語の創造的側面は、つぎの引用の通り、人間に固有の能力として扱われるわけである。

[41] [...] “the creative aspect of language use,” the distinctively human ability to express new thoughts and to understand entirely

new expressions of thought, [...].

(Chomsky 2006: 6)

よって、演繹的な抽象度が高い計算体系としての統語規則が重視され、それにより、言語の創造性が維持されることになるわけである。

一方、認知文法では、つぎの引用の通り、言語の創造的側面を認める。

[42] In particular, we have every reason to believe (and no real reason to doubt) that people are perfectly capable of conceiving entities and situations for which no standard linguistic expression is available; 'linguistic creativity' in Chomskyan sense is basically ability to provide novel linguistic characterizations of these entities and situations.

(Langacker 1976: 312)

ただし、認知文法では、新規の表現(novel expression)に対する予測性は、ネットワーク上のスキーマによる認可(sanction)の問題として規定され、あくまでも帰納的な実例の使用を基に構築される抽象度に過度に左右されないスキーマの予測性の問題として扱われるものである。¹²

3.9 対話のまとめ

これまで、様々な概念をめぐって生成文法との対話を通じて認知文法の言語観を考察してきたが、その結果はつぎのようにまとめられる。

	生成文法	認知文法
目標	人間の「知」の解明、とりわけ、言語に関する「知」の解明	
科学観	自然科学としての言語学; 普遍文法・言語能力の重視	より根源的な自然さの探求・実在性の重視; 一般的認知能力の共働の精神の重視
方法論	方法論的一元論	方法論的二元(多元)論
言語能力	言語に特化した言語能力の想定	言語に特化した言語能力への疑問; 一般的認知能力の総体による規定
自律性	強い自律性: 自律性テーゼ	弱い自律性: 記号的テーゼ
文法と記述	記述的妥当性→説明的妥当性; 「理想化」された話し手・聞き手に内在する「理想化」された言語能力の記述	記号的文法観・使用依拠モデル; 「実際の」話し手・聞き手の「実際の」慣習化された言語の蓄えの記述
言語使用の創造的側面	有限の手段の無限の使用; 演繹的な抽象度が高い計算体系としての統語規則の重視	帰納的な実例の使用を基に構築される抽象度に過度に左右されないスキーマによる認可(i.e.予測性)の問題

表 1

このように、生成文法と認知文法では、異なるアプローチ法を取るが、目標としているところは同じく人間の「知」の解明、とりわけ、言語に関する「知」の解明である。繰り返すが、どちらの理論が正しいとか優れているということを判断することは本稿の目的を大きく超えているし、本考察を通してそのような判断の結実を全く望むものではない。

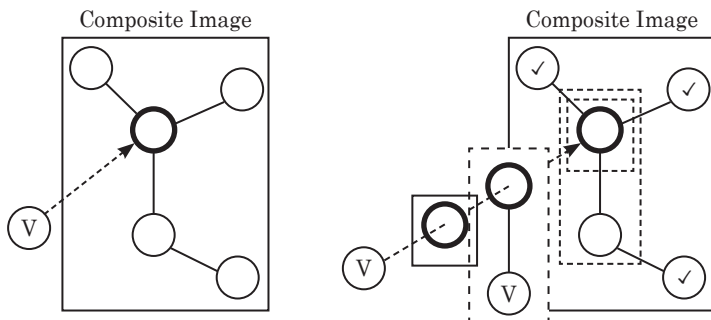
4. 記号的文法観の現れとしての文法現象

最後に本節では、これまで見てきた理論的考察に一貫して通じる記号的文法観の意義について、若干の実例と共に論じ、稿を締めくくりたい。

記号的文法観を重視する認知文法では、記号表現の統合(integration)に関して、単純な足し算としての「積み木(building block)」型の意味算

出を排斥する。もちろん、足し算的な計算によって意味が算出する例もあるかもしれないが、そのように算出できない事例も多々存在する。後者の事例は個々の要素には還元できないゲシュタルトの意味を持ち合わせるものである。このような事例を鑑みて、認知文法では、「透明シート(plastic transparency)」型の合成性の原理(the principle of compositionality)を考えている(cf. Langacker 1995)。この透明シートとはメタファーであり、いわばOHP(overhead projector)のシートのようなものである。一枚一枚のシートにもものを書き込むと、シート毎に書かれている内容は異なるが、シートを重ねて投影すると、あたかも一枚のシートに書かれているかのように見えるのが特徴的である。

こうした透明シート型の統合の様子はつぎの図に描かれている。図8の左図では、統合による結果としての合成構造(composite structure)が示されているが、これはシートのメタファーでいうと、全てのシートが重なり、あたかも一枚のシートに描かれたものを見ているかのような様子である。このため、太丸の実体を記号化するためには、概念主体は直接それにアクセスすることになる。一方、図8の右図の合成構造は、統合の際にいくつかのシート、つまり成分構造(component structure)が重なっており、概念主体は一枚一枚のシートを重ね合わせて行く様子を見る、つまり、それぞれの成分構造にアクセスして、太丸の実体が記号化されるという様子が示されている。例えば、こうした統合の様子には、先にみた“complainer”の例が当たる。しかし他方で、右図のその他のチェック印(✓)のついた実体は、そもそも成分構造には還元できないゲシュタルトの意味を持ち合わせるもの、つまり、「部分的合成性(partial compositionality)」に基づくものであり、この図ではそうした統合の様子が適切に示されている。例えば、先にみた“computer”のように要素同士を足し合わせても意味が算出されないような例がこれに当たる。



(Langacker 1995: 169, 一部改変)

図 8

以上のように、認知文法では、記号表現の統合に関して、合成構造と成分構造の観点から適切に説明を与えることができる仕組みを有しているわけである。

つぎに、記号的文法観に基づく部分的合成性という概念がなければ説明できない文法現象が存在することを確認するために、「結果構文 (Resultative Construction)」の事例を考察しよう。まず、つぎの結果構文をみよう。

- [43] a. They broke the vase into pieces.
 b. John hammered the metal flat.
 c. Mary pushed the door open.

それぞれの例は、ある動作主が非動作主に何らかの力を加えて、後者がある結果状態に至るということを表すものである。では、これらの例では、結果状態は動詞の中に含まれており、それぞれの要素を合成することによってこうした意味が予測可能なのだろうか？ここで、それぞれの例の動詞の定義を確認しよう。

- [44] a. **break**: if you break something, you make it separate into two or more pieces, for example by hitting it, dropping it, or bending it
- b. **hammer**: to hit something with a hammer in order to force it into a particular position or shape
- c. **push**: to make someone or something move by pressing them with your hands, arms etc

(LDOCE⁵)

- [45] b'. **hammer**: to hit sth with a hammer

(OALD⁸)

まず、break には[44a]の下線部のように結果状態が含まれており、ゆえに、[43a]のような結果構文は成分構造のそれぞれの要素の意味が統合されることで合成構造が概念化されるものだと考えることができる。つぎに hammer には、[44b]の下線部のように結果状態が含まれているものと、[45b']のように、結果状態が含まれていないものが想定される。したがって、[43b]の結果構文は、成分構造としての個々の要素の意味が合成されることで合成構造の意味が概念化されると言えるし、それぞれの成分構造の意味からは合成構造の意味が予測できないような意味をもつものとして想起されているとも言える、中間的な事例である。他方、push には[44c]のように、結果状態が含まれていない。したがって、[43c]の結果構文はそれぞれの成分構造の意味からは合成構造の意味が予測できないものである。このように考えてみると、結果構文には、[43a]のように、完全な合成性に基づくものと、[43b]のように、完全な合成性、あるいは、部分的な合成性に基づくものがあり、さらに、[43c]のように、部分的な合成性に基づくものの3タイプが存在し、これらは「勾配(gradience)」

をなしていることが分かる。そして、こうした部分的な合成性に基づく事例は、個々の語彙要素からは予測つかないものであるから、音と意味の慣習的なペアである「構文(construction)」という記号単位を想定しないと、説明がつかないものである。こうした構文は記号的文法観が反映された例のひとつである。

さらに、つぎの結果構文の事例をみよう。

[46] a. I danced myself tired.

b. The dog barked the baby awake.

これらの動詞はもはや自動詞であり、力の流れが感じられない。したがって、これらは本来は目的語をとらないはずである。事実、[47]の定義のように、こうした動詞には力の流れもなければ、結果状態も語彙化されていない。

[47] a. **dance**: to move your body to the sound and rhythm of music

b. **bark**: when a dog barks, it makes a short loud sound

しかしながら、これらは[43]と同じように（みせかけの）目的語とその結果状態を描写する結果構文であるからには、音と意味の慣習的結びつきである構文という記号単位を想定しないと、自然な説明がつかない。やはり、記号的文法観に基づく部分的合成性という概念を想定することが必須なわけである。

以上のように、本節では、結果構文のわずかな事例だけを挙げたが、この事例だけからも自明のように、認知文法が掲げる記号的文法観という精神は様々な文法現象の中に現れており、自然言語を説明するためには、必要不可欠な概念であると結論づけることができる。

5. 結 語

本稿では、認知文法の真髄とも言える記号的文法観に関して、集積的に整理することを目標として掲げ、認知文法の思考法を考察してきた。まず、記号的文法観を概観し、その後、記号構造は認知能力・プロセスを反映するもの（cf. 認知的文法観）であることをみた。さらに、記号的文法観を掲げる認知文法の精神を変形生成文法との対話を通じて明確にした。最後に、記号的文法観の現れとしての文法現象を概括し、記号的文法観の意味合いを再確認した。こうした記号的文法観は、認知文法の根幹をなす思考法であることは、もはや言うまでもない。

<注>

¹ 本稿は2016年9月8日の第6回認知文法研究会(於: 国立情報学研究所)での発表「記号的文法観としての認知文法」に加筆・修正を施したものである。発表に際し、フロアの方々から質問および建設的なご意見を頂戴した。ここに記すと共に御礼申し上げたい。なお、本稿に不備があるとすれば、すべて著者である對馬の責任である。

² Yamanashi (2016: XXII)では、認知文法のパラダイムの2つの主要原理として、「記号的テーゼ(the symbolic thesis)」と「使用依拠的テーゼ (the usage-based thesis)」が挙げられており、これらは認知文法の根幹をなす精神であることが述べられている。

³ さらに、Langackerの1991年の著作では“communicative function” (Langacker 1991: 1)とも呼ばれる。

⁴ ここで「慣習化」という用語が使われているが、“conventionality (慣習化)”とは共同体内(a speech community)での言語の蓄積のことを示す。一方、主体個人(a particular speaker)の言語の蓄積の問題は“entrenchment (定着)”と言い、使い分けられているので注意されたい。

⁵ 内容要件(content requirement)とはつぎのように定義される。

[A] [...] the only elements ascribable to linguistic system are (i) semantic, phonological and symbolic structures that are actually occur as parts of expressions; (ii) schematizations of permitted structures; and (iii) categorizing relationships between permitted structures.

(Langacker 2008: 25)

⁶ 認知文法の理論基準については、野村(2008)も参照のこと。

⁷ 對馬(2015)では自然さとしての實在論をつぎのように分類している。

[B] a. 「認知能力」に基づく人間の認知の営みを利用した道具立て(理論)
の實在性

b. 言語体系の仕組みは記号構造(すなわち、意味構造と音韻構造からなる象徴構造)を反映したものを扱うという記述対象の實在性

(對馬 2015: 622)

⁸ 内容要件については、注5を参照されたい。

⁹ しかしながら、昨今の生成文法理論では、生物言語学・進化言語学などの興隆により、(4)の「言語の脳科学的基盤」、(5)の「言語の進化・(系統)発生」に関して、言及されつつある(cf. Chomsky 2016, Berwick and Chomsky 2016, Hauser, Chomsky, and Fitch 2002など)。

¹⁰ ここでは、認知言語学(Cognitive Linguistics)のうち、認知文法(Cognitive Grammar)だけを射程に収めて議論していることに注意されたい。

¹¹ 認知文法が掲げる「實在性」についての詳細の議論は、對馬(2015)を参照のこと。

¹² 認可(sanction)とはつぎのように定義される。

[C] **sanction**: The motivation afforded a novel structure by the conventional unites of a grammar. **Full sanction** involves an elaborative relationship (one of full schematicity) between the sanctioning unit and target structure; **partial sanction** involves a relationship of extension (or partial schematicity, in which there is some conflict in specifications). Although partial sanction implies some degree of illformedness, a considerable degree of nonconventionality is tolerated and often expected in actual language use.

(Lanagcker 1987: 492)

<参考文献>

- Berwick, Robert C. and Noam Chomsky. 2016. *Why Only Us: Language and Evolution*. Cambridge: The MIT Press.
- Chomsky, Noam. 1965. *Aspects of the Theory of Syntax*. Cambridge: The MIT Press.
- Chomsky, Noam. 2004. *The Generative Enterprise*. Berlin: Walter de Gruyter. (福井直樹・辻子美保子(訳). 2011. 『生成文法の企て』 東京: 岩波書店.)
- Chomsky, Noam. 2006³. *Language and Mind*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam. 2009³. *Cartesian Linguistics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Chomsky, Noam. 2016. *What Kind of Creatures Are We?* New York: Columbia University Press.
- Chomsky, Noam and James McGilvray. 2012. *The Science of Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 福井直樹. 2012. 『新・自然科学としての言語学』 東京: 筑摩書房.

- Hauser, Marcd D., Noam Chomsky, and Recumseh Fitch. 2002. "The faculty of language: what is it, who has it, and how did it evolve?" *Science* 298 (5598). 1569-79.
- Langacker, Ronald W. 1976. "Semantic Representations and the Linguistic Relativity Hypothesis." *Foundations of Language* 14. 307-357.
- Langacker, Ronald W. 1983. *Foundations of Cognitive Grammar*. Indiana University Linguistics Club.
- Langacker, Ronald W. 1987. *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. Vol. 1. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1990. *Concept, Image, and Symbol*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar: Descriptive Application*. Vol.2. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 1995. "Viewing in Cognition and Grammar." In: Philip W. Davis (ed.) *Alternative Linguistics: Descriptive and Theoretical Modes*. 153-212. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. 1999. *Grammar and Conceptualization*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2000. "A Dynamic Usage-Based Model." In: Michael Barlow and Suzan Kemmer (eds.) *Usage Based Models of Language*. 1-64. Stanford: CSLI Publications.
- Langacker, Ronald W. 2003. "Explanation in Cognitive Linguistics and Cognitive Grammar." In: John Moore and Maria Polinsky (eds.) *The Nature of Explanation in Linguistic Theory*. 239-261.

CSLI.

- Langacker, Ronald W. 2004. "The First 40 Years." In: Barbara Lewandowska-Tomaszczyk and Alina Kwiatkowska (eds.), *Imagery in Language: Festschrift in Honour of Professor Ronald W. Langacker*. 31-41. Peter Lang.
- Langacker, Ronald W. 2005. "Construction Grammars: cognitive, radical, and less so." In: Francisco J. Ruiz de Mendoza Ibáñez and M. Sandra Peña Cervel (eds.) *Cognitive Linguistics: Internal Dynamics and Interdisciplinary Interaction*. 101-159. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- Langacker, Ronald W. 2007. *Ten Lectures on Cognitive Grammar*. Beijing: Foreign Language Teaching and Research Press.
- Langacker, Ronald W. 2008. *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford/New York: Oxford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2009. *Investigations in Cognitive Grammar*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter.
- 中村芳久. 2012. 「認知モード・言語類型・言語進化－再帰性(recursion)との関連から－」『KANAZAWA ENGLISH STUDIES』28巻. 285-300.
- 野村益寛. 2008. 「認知文法のアルケオロジー」『KLS』28. 360-370.
- 野村益寛. 2014. 「認知文法の思考法－FCG1, Ch. 1を読む－」『北海道大学文学研究科紀要』142. 33-62.
- Tomasello, Michael. 2003. *Constructing a Language*. Cambridge and London: Harvard University Press.
- 對馬康博. 2015. 「人間の認知能力からみた概念化の世界観の再考」『日本認知言語学会論文集』第15巻. 622-627.
- 對馬康博. 2016. 「福村虎治郎の言語観の回顧」『文化と言語』第84号. 25-63. 札幌大学外国語学部紀要.

Yamanashi, Masa-aki. 2016. “New Perspectives on Cognitive Linguistics and Related Fields.” Masa-aki Yamanashi (ed.) *Cognitive Linguistics*. Vol. 1. XIX-XLIX. London: SAGE.

<辞 書>

Longman Dictionary of Contemporary English. 5th edition. (LDOCE⁵)

Oxford Advanced Learner's Dictionary. 8th edition. (OALD⁸)